



意識 北海道砂金案内



へるふね perupnei





# 目次

意訳 北海道砂金案内 .....	1
------------------	---



## 意識 北海道砂金案内

北海道砂金案内は明治33年5月、蓑田政徳、若菊生らにより著された。蓑田政徳らなどの様な人物かは不明だが、本著を読む限り、両者は北海道宗谷支庁の職員である。宗谷支庁の職員が本著を執筆した理由も解らないが、枝幸砂金発見当初の記録は貴重である。本書は難解な原文を、簡単かつ簡潔に意識紹介するものである。

### 例言

本著は、北海道砂金案内と言う。その記述は枝幸に止まるが、それは枝幸の砂金が全道を圧倒しているからである。砂金の採取状況や方法はどこも同じで、枝幸を特記したのは、推して全体を把握するためである。文中砂金に関する学説は、西山鉦山監督署長により、採取の状況その他は、私が昨年見聞きしたものである。明治33年5月若菊生記

### (一) 砂金発見の由来

北海の地鉦物に富み、至るところで砂金を産する。知内川、利別川、夕張川、染退川、天塩川、北海11州中砂金の発見がないのは、千島、根室のみで、六千万里の北海道は、ことごとく黄金で満たされている。その中で、日本のクロンダイクとして天下の耳目を集めているのは北見国枝幸である。枝幸と言えばその評判絶大で、昨年来2万に達する旅客を集め、240万円の黄金を産出した。ここに、枝幸の砂金について述べる前に、北海全道における砂金の沿革を記す。

#### (1) 北海道砂金の沿革

北海道において初めて砂金が発見されたのは、今から7百年前、鎌倉時代の事である。旧記によれば、建久年間、奥羽の金売吉次なる者が日高に渡航し、シベチャリ川で砂金を発見した。彼は同士とともに盛んに採取したが、アイヌの襲撃を受け廃絶したという。次いで將軍頼家の時代、筑前の船子が、難に遭い渡島の知内に漂着した。そして知内川で煌々たる金塊発見し、持ち帰って將軍頼家に献上した。頼家大いに喜び、船主荒木大に砂金採取を命じ、大は一千の郎党を率いて渡道し、砂金採取に従事したという。元文年間、徳川幕府は金座後藤庄三郎を宗谷に派遣、砂金を探索させたが、得るところなく帰京した。明治、開拓使は北海道の拓殖を急ぎ、外国人を招聘して地質調査を行い、各地で砂金を発見した。その結果、砂金の産出地として知られたのは、知内川、利別川、

夕張川、空知川、ドナクベツ川、シベチャリ川、ニイカッブ川、ポロベツ川、天塩川であるが、いずれも産出が少なく、物産としては成り立たなかった。しかし、明治30年以降、俄然注目を集めたのが枝幸砂金の発見である。

#### (2) 枝幸の不漁

北海道は、北見国を8郡とし、これを管轄するため宗谷、網走の両支庁を設けた。宗谷支庁は利尻、礼文、枝幸の4郡を所管するが、枝幸郡は20余里の海岸線を有する漁村であり、住民はニシン漁を本業とする。枝幸における砂金の発見は、全くニシンの不漁に起因するのである。ニシンが豊漁だった明治26～7年頃、住民の一部が幌別河口で少量の砂金を発見した。しかし、漁民の目はニシンの群来に注がれており、砂金を発見しても特に喜ぶでもなく、何故ここに砂金が捨ててあるのか不思議に思ったという。しかし、彼らが砂金よりも尊いとするニシンは、明治29年以降漁獲が減少し、31～2年に至っては、不漁と言うより収穫皆無という有様となった。北海道におけるニシンは内地の米と同じである。農民が米で1年間の生計を立てる様に、漁民はニシンで生計を立てるのである。つまり、ニシンの不漁は、直ちに漁民の死活問題を惹起する。そのような状況が2年も3年も続いたのであるから、枝幸の漁民は失望落胆を乗り越え、進むべき道は逃亡か餓死か、数十年来繁栄した枝幸は、一朝にして荒涼の寒村となってしまったのである。

#### (3) ウソタン及パンケナイの砂金

逃亡するも路銀なし、売るも物件なし、ただ座して死を待つのみ。死は人の最も忌むところであり、彼らは躍起になって生存の策を講じた。人は絶体絶命の窮地に立てば自然と名案を絞り出すもので、やがて幌別河口における砂金を思い出した。彼らは無学の民であり、鉱山学など知る由もないが、三人寄れば文殊の知恵、「思うに海浜の砂金は、幌別川氾濫で流され来たものに違いなし、されば砂金の元は幌別川にあり。」と探検を試みる事となった。幌別の上流、頓別の支流、深山幽谷を跋涉し、幾多の危険と困難を乗り越え、ついに、ウソタン、パンケナイの砂金を発見するに至ったのである。探検者は光輝燦爛たる砂金を持って帰村し、評判はたちまち全郡に広がった。「救いの神は深山の奥に光臨せり。」と、窮民らは一夜づくりの粗末な器具を携え、我も我もと採取に従事した。すると、皆多少の収穫があり、枝幸の砂金は天下の大評判となった。ここで、抜け目のない連中は奇貨居くべしと先を争って出願し、窮民が命を賭して発見したウソタンは広谷某、パンケナイは堀川某の所有となった。ウソタン及びパンケナイの砂金はこの様にして発見され、またこの様にして広谷、堀川の手に戻したのである。次に発見されたのは、ペーチャンである。ここも多くの砂金を産出し、採取者は一時5千を超えた。しからばペーチャンの砂金はどの様にして発見されたのだろうか。

#### (4) ペーチャンの砂金

ペーチャンの砂金は31年5月に発見された。そのきっかけはウソタンにおける広谷の苛酷に基づく。ウソタン砂金の発見者は枝幸の窮民であるが、一旦広谷の所有になった以上、勝手に採取はできない。広谷は採取料として、1人1カ月3匁(12円)を前金で徴収するとした。しかし、採取者の大半は連年不漁の窮民であり、どうして12円もの大金を用意することができようか。そこで彼らは広谷に、「我ら赤貧洗うが如き窮民にて採取料前納の資力なく、月末支払いで許可されたし。」と、広谷頑として聞き入れ

ず、「携える毛布衣類を担保とする。」と嘆願するも、事務所は質屋にあらずと、「しからば12円を3回に分納する。」「しからば2回はどうか。」いずれも拒否され、しまいには「うるさい！」と大声で叱咤放逐するに至った。この様な残忍酷薄は痛く同胞の怒りを買ひ、彼らは連日集合して非常手段を取らんと、形勢穏やかならざる状況となった。これを知った枝幸戸長ら有力者が仲介し、採取料を半減することでようやく窮民らの激高を抑えたのである。しかし広谷は、6円で許可はしたものの、採取区域を限定し、最も砂金が豊富な区域は採取禁止にする等の暴挙に出た。この結果、資力無き窮民は1週間ばかりの食料を携え、3～5人1組となって至るところの山河を探り、その結果遂にペーチャン砂金を発見したのである。この様に、ペーチャンの発見は、広谷が窮民に対する措置を誤った結果であり、窮民らが過重な採取料を嫌い、無料である官地密採の利益を求めたことによる。

## (二) 砂金採取区域

札幌鉱山監督署によれば、明治33年2月における許可区域は、河床1,300里、山林2億2千万坪である。現在出願中や、これから出願しようとするものを加えれば、将来の区域は、幾数千里、数百億坪に達するかわからない。現在の許可区域を見ると、河床では北見国が660里と最も長く、次いで天塩国の330里、更に石狩国の90里と続く。面積では石狩国が1億7千万坪、次いで天塩国の3千2百万坪、北見国が1千4百万坪となり、単純に延長、面積で見れば、石狩国を第1とし、次いで天塩国、北見国の順となる。砂金の出願をするには、砂金採取法に基づき、所轄鉱山監督署長を経由して、農商務大臣の許可を得なければならない。そして、今日まで許可を得た者は40名を超えるが、彼らは1人として自ら採取する者は無く、皆採取料を徴収して、他人に採取させている。何故自ら採取しないのかと聞くと、鉱夫が砂金を隠匿、転売するからだという。なるほど砂金は石炭等と違い、隠匿転売するのが容易であり、一定の採取料を徴して自由に採取させた方が儲かるというのも理解はできる。採取料は入場料と称し、砂金を採取しようとする者は、一定の料金を納めさえすれば番号を付した鑑札を交付され、密採者と区別するのである。各砂金鉱区には2名以上の請願巡查を置き、密採を取り締まっている。そしてその鑑札料は場所によって異なるのであるが、2円～16円となっており、平均すると1人1カ月10円となる。そうすると昨年の入場料は30万円、今年は少なくとも120万円に達し、鉱区主は、僅か10円の印紙代で、120万円の収入が得られるのである。

## (三) 金採取方法失敗の原因

砂金採取区域は今や千を超えている。しかし、採取の状況はどこも同じであり、ペーチャンの状況により全体を窺う。昨年秋におけるペーチャンの採取区域は、延長5里で小屋数6百、採取人5千である。この様に多数が砂金を掘った結果、朝に鏡の様な清流は夕に濁流と化す。採取は毎朝4時に着手、薄暮に終わる。採取の資本は16円～22円で、道具代10円の外は入場料である。採取者は、当初川の中を掘っていたが、最近で

は、川中はもちろん、川流を変更し、堤防敷地を破壊し、山をも崩す勢いで掘り進んでいる。採取方法は、堀上げ、流掘りの二つであり、堀上げの方法が最も盛んである。堀上げというのは、あらかじめ川の適当な場所を選び、堰を作って流水を他方に流し、深さ5～6尺の穴を掘り、1人が鉄棒で石を起こし、1人がカッチャで砂をかき出し、1人がバケツで運び、1人が筵の上でふるい、筵に溜まった砂をユリ板に移して、砂金をより分けるという方法である。対して、流掘りというのは、川中に長さ3間程の池を作り、1人が鉄棒で池中をかく乱する。そして、水と共に流れ出る砂金を、下流に設けた堰で受け、1尺ほどの筵を敷いて砂金の沈殿を待つのである。筵は2～3時間ごとに替え、引き上げた筵をユリ板で洗い、砂金をより分けるのである。いずれの方法も、1回に粟粒状の砂金5～10粒が得られ、これを集めて1日1～50匁を得る。正に砂金採取は、「塵も積もれば山となる」的な忍耐仕事に加え、雲霞の如く襲い来る虻蚊との戦いでもあり、短気の者、繊弱者では到底成功することはできない。

#### (四) 砂金採取期間

農商務省では、水産資源保護のため、砂金採取期間を5月から9月までとしている。しかし枝幸の鉱区主は砂金の採取は水産に障害がないとして、札幌鉱山監督署、北海道庁に制限解除の陳情を行った。その効果が実ったのか、本年2月、札幌鉱山監督署は解放の辞令を交付した。このため一部の制限区域以外は、365日何時でも採取できるようになったのである。今までは規則上の制限があるとはいえ、実態上全く無制限であり、氷雪天地に満ち、寒風身を割く季節でも採取する者がおり、無効力の制限より、解放する方がどれだけ良いか推して知るべきである。

#### (五) 産金額及び金質

北見の砂金がクロンダイク、ウィットオーターズランドと並び称されるのは喜ばしいが、その産額は全く及ばない。彼の地は面積広大で器械が精巧、採取が大仕掛けであり、狭小、粗漏、小規模な枝幸とは比べ物にならない。ちなみに、去年の枝幸の産額は600貫240万円で、ウィットでは500万オンス2億円である。枝幸の産額はウィットの100分の1に過ぎず、九牛の一毛とはこの事である。しかし、枝幸では未だ金鉱脈が発見されておらず、産金は河床から採取したものに止まる。もし金鉱脈が発見されれば、その産額は一躍前者を圧倒するかもしれない。ウィットでは、今日でこそ2億円の巨額を産するが、その当初は僅か10万円に過ぎなかったのであり、北海砂金の前途は益々有望であるというべきである。枝幸の砂金は灰青色の火山質粘土中に混入するが、その形は千差万別で、粟粒状、大豆状、親指状のものがおり、ウソタンの広谷が東宮殿下に献上した金塊は75匁、帝国博物館に陳列したものは30～50匁である。そしてその金質は、100分中83、最大では100分の90を超えるという。

#### (六) 北見砂金の将来

北見砂金の将来はどうか。すなわち、枝幸の砂金はいつまで続くのか、西山鉱山監督署長は次の様に語った。「枝幸砂金の根源は、北見天塩の国境であるポロヌプリ山である。現在盛んに砂金を産出する頓別、幌別の二川はいずれもこの山を源とし、北側海浜に砂金が含まれるのを見ても明らかである。私が調査したところ、河川の末流や海浜の砂金は、その形が小さく丸く、上流に行くに従い、大きく角張っているのである。付近の岩石は硫化銀の鉱質であるが、元来砂金は、最初から砂金として存するものと、鉱脈として存するものがあり、北見の砂金は、ポロヌプリの鉱脈に含有していた金が、風化して一つは川に入り、一つは砂金層となって、地中に集合したものと思われる。そうであれば、ポロヌプリを源とする天塩、北見の河川は、その区域も広大であるので、砂金は莫大にあり、2万や3万の採取人が10年や20年で掘りつくせるものではない。」西山氏によれば、枝幸の砂金は前途益々有望で、その産額幾百億に達するというので、正に日本にとって喜ぶべきことである。

#### (七) 砂金採取者の取り締まり

利あるところ民争って之に集まる。あたかも蟻が蜜に群がるが如き。砂金の好評天下に轟き、各地から枝幸に向かって走る者益々多く、たちまち1万の多数に上る。1万人もがいか所に集まれば、必ずや騒動が起きる。まして、利欲に満ちた烏合の衆である。彼らはただ射利を目的とし、彼らの眼中は利有って義なし、射利の念は優勝劣敗の勢力争いとなり、変じて横奪強取の蛮行となり、やがて竹槍席旗の暴挙となる。宗谷支庁長松村勇之進は、取り締まりを嚴重にして災いを未然に防ごうと、園田北海道庁長官に建策を呈したが、一言の下に排斥された。しかし、札幌地裁黒田裁判長が枝幸砂金地を視察、道庁警察部から警部巡查十数名を派遣して取り締りに当たらせるとした外、内務省は警部5人巡查50人を措置すべく経費の交渉中という。

#### (八) 砂金採取に伴う弊害

荒野に帰すべき枝幸は砂金により救われた。枝幸の繁栄は砂金によって保たれた。言わば砂金は枝幸の恩人である。その恩は枝幸の一部に止まらず、国家経済上の利益をもたらした。見よ！ 帝国貨幣制度を改革し、金本位制を取って以降、外国貿易の不均衡は砂金の発見により解決された。しかし、一方に利有れば他方に害あるは社会の常識で、砂金採取の弊害として、山火、官林乱伐、農事の荒廃、疾病、通信機関の弊害等がある。

##### (1) 山火

山火は一朝にして百万町歩を焼き、幾百万の良材を灰に帰するだけでなく、延焼して家を焼き、財を焼き、生命を奪うに至る。恐るべきは山火であり、慎むべきは1本のマッチである。砂金発見後枝幸の山火は、採取人の不始末に期すものが多い。採取人が便宜の場所に小屋を作り、一夜の宿とし、休憩所とする。彼らは枯木、枯葉を集めて焚き、やがて火の粉飛散し、小屋を焼き笹を焼き、全山を灰にするに至る。昨年5月12日午後1時頃、枝幸村保安林、ウエンナイ官林、歌登村モーツ官林、ニシユンナイ官林同時に火起こり、延焼3日、火勢猛烈にして、あわや枝幸市街を焼き払う勢であったが、消防

の尽力により災難を逃れた。しかし、19日に至り、姥苦内と目梨泊、礼文村オッチェウベ官林に火起り、目梨泊全村類焼し、その損害幾百万に上るのは間違いない。

#### (2) 官林乱伐

官林被害が大きいのは山火であるが、これに次ぐのが乱伐である。砂金採取人の幾百の小屋は、官林を乱伐して作られ、小屋の材として切り倒されたものは幾千に及び、飯を炊き、暖を取る為に伐採した枯損木を思えば、乱伐により生じる損害も少なくない。

#### (3) 農事の荒廃

開墾は殖民第一の目的である。しかし、砂金の発見は開墾事業に著しい支障を与えた。耕作地は耕転せず、播種せず、今や荒蕪に帰せんとしている。砂金1匁の時価は4円、一団1カ月の採取高を1貫目とすれば、北海道庁長官の年俸は1カ月、内閣総理大臣の年俸は3カ月で採取することができる。単に収入の面から見れば、昨日の窮民は今日の長官である。目先の利益により打算すれば、朝に星を見、夕に月を踏んで茅屋に帰る1日の労働が、1円にも満たない農業よりも、1日5分や1匁の砂金採取が勝るのは言うまでもない。故に鋤を捨てカッチャを担ぐ者幾千か知れず。現に幌別殖民地の片岡、松垣農場の小作人33戸は、いずれも戸を閉ざし砂金採取に出かける有様で、農業に及ぼす影響推して知るべきである。

#### (4) 疾病

終日水中にあれば、いかに健康の者と言えど病気になる者多い。医師によれば、脚気、チフス、リュウマチはこの種の労働者に最も多いという。しかし、深山に医師無く、薬無く、伝染病広まれば、幾千の入山者は将棋倒しになる。幸い今日までその様な事例はないが、この種の伝染病はいつ如何に襲来するかも知れず、一旦病魔発生すれば、たちまち枝幸市街に侵入するは疑いのないところである。

#### (5) 郵便通送人の欠乏

採取により生じる弊害は、山火、乱伐、荒廃、疾病に止まらず、通信機関にも及ぶ。宗谷、枝幸各駅通所では郵便通送人に欠乏を来し、通送に支障が生じている。元々通送人は1カ月6~7円の給与であるが、昨年以降9~10円でも応ずる者がない。1月の給与は僅か3日で採取できるためである。このため補充ままならず、駅通所は通送人を詮索し日夜汲々としている。

#### (九) 砂金発見後の枝幸

年々不漁を極めた枝幸は、甚だ不景気であったが、今や枝幸の人民は、黄金の山に伏臥し、黄金の匂いに酔い、不景気の何たるかも知らない。金融はどうか。昨年初頭には、見ることもなかった5円10円の紙幣は、5月以降続々と現れ、これと正反対に補助貨幣は姿を消し、釣銭にさえ事欠く始末である。旅客はどうか。不漁の結果、住民さえ転居せざるを得ず、旅館らしきものは僅か4軒であったが、砂金の好評は多数の旅客を吸収し、旅館不足で新たに開業するもの多数。木賃宿に泊まる者、直接砂金場に赴く者、親類縁者を頼る者等合算すれば、枝幸に出入りする者2万を下らない。旅客の多少で景気が左右される訳ではないが、今日の枝幸の繁盛は、旅人によって保たれているのは間違いない。料理店、貸座敷はどうか。これも旅館と同じく不漁により客足遠く、芸娼妓の

乾物を見る有様であったが、すう勢挽回し、料理屋も妓楼も芸妓、娼妓も著しく増加している。その他蒙昧茶屋、密淫売婦の増加は驚くべきである。人が枝幸でまず目にするものは金の指輪である。芸妓と言わず娼妓と言わず、女性であれば指に金光なき者はない。とりわけ美人は、1個では足りず、2個も3個も嵌めている。砂金採取人は1週間分の食料を持って入山するが、やがて町に出れば、命の洗濯をしようと、飲めや歌えの豪遊を試みる。美人はこの間にあらん限りの手練手管を駆使し、難なく砂金を巻き上げるのである。また砂金採取人の多くは、砂金を支払いに充てるため、商店、料理屋、妓楼等は、いずれも多量の砂金を蓄えて、山吹色は珍しくもないという。物価はどうか。好景気で物価の高騰日本一と言うのも頷ける。白米1升30銭、味噌9銭、大阪酒38銭、福神漬30銭、草鞋4銭、塵紙5銭、理髪25銭、銭湯3銭である。砂金地では白米1升50銭、1石50円の計算となり、全く驚くべき高値である。

#### (十) 砂金山紀行

内地から枝幸に行くには、一旦小樽に出、船で直行するのが便利である。しかし、船の都合により、直行できない場合には稚内から陸行することになる。本稿は、私が松村支庁長の視察に随行した記録であり、もって陸行者の便宜を図る。なお本稿は、渡邊鈍牛生の名で「北海時事」に投稿したものである。(若菊生記)

##### (1) 稚内港

6月6日、稚内港は北海道北部における唯一の良港である。私は、砂金の話を聞くため宗谷支庁長松村勇之進宅を訪ねた。松村氏については、樺山文部大臣の秘書として、雲林の勇将として、敏腕の支庁長として承知しており、温厚な容姿は人々に親しまれ、堂々たる威風は敵を圧倒し、初対面の私でも敬慕の念を禁じ得ない。支庁長宅では、事業手高尾克一、佐野健吉両氏が、砂金発見の原因である漁業の不振や、どの様に砂金が発見され、どのように枝幸の繁栄が維持されたか等を説明していた。私は、話を聞いて1日も早く出発したくなったが、松村氏がもう3日延期してはどうかと言うので、6月9日、9時を期して出発することにし、首を長くして期日を待った。

##### (2) 稚内港 - 宗谷駅 (6里強)

6月9日、期日到来し出発時刻が迫った。私が、行李を整え支庁長宅邸に到着すると、直に出発の命令が下された。時午前9時30分。一行は、松村支庁長、蓑田政徳、和佐栄吉、私の4人で、支庁長は騎馬、他は徒歩である。出発に先立ち支庁長は、「諸君らの健脚はよく知っているが、馬にはかなわないだろう。ここから2里で声問村があるが、その小野寺旅館で待つ。」と告げ、長鞭一閃砂塵を立てて走り去った。随行の蓑田氏は私の竹馬の友である。3年振りに極北の地で邂逅した。道中昔話をし、今を語り、2里の行程は夢の様に過ぎた。声問村に着いたのは午後、急いで小野寺旅館に行くと、支庁長は首を長くして待っていた。この日は宗谷駅泊の予定である。稚内から同駅へは6里強であるが、既に3分の2は過ぎており馬と並行して歩く。薄暮宗谷駅着、井上旅館に投宿。夜大雨となるが、枕を高くして三絃の妙音を聞き、いささか旅愁を慰むる。

##### (3) 宗谷駅 - 杖苦内 (チエトマナイ) 駅 (6里)

6月10日、夜來の風雨未だ止まず。満天雲が流れ晴れる様子も見えない。この様な

時に晴れを待つのは、雲林の将として名を馳したる松村支庁長の忌むべきところである。午前9時、一行は雨の中杖苦内駅に向かう。この日支庁長は筋骨逞しき馬に跨り、我ら3人は弥次喜多道中である。雨中の旅行は困難ではあるが、格別の趣がある。音に名高き宗谷岬を通る際、雨激しく進行は益々遅くなる。ようやく2里で尻白村に到着した。同村は稚内、枝幸に次ぐ大集落で、郵便局、病院、学校がある。昨年までは憲兵の屯所さえあった。尻白より杖苦内駅間に昨年開削した新道がある。雨ともなれば地盤固まらず泥濘膝を没し、谷また谷、坂また坂、旅客の苦しむところである。日暮着駅、駅通所に投ずる。駅通人末吉原作如才なく、浴後酒を飲んで終日の労を労う。僻遠の地に見るべきものないが、家に16の箱入り娘あり、その名を「時」という。雨に滴る彼女の一笑は酒を進める価値がある。華やかな服装にて、時に香鼻を襲うは一層の嬌を添える。冷評すれば、美人満面朱を注ぎ忽々去って遂に帰らず。

#### (4) 杖苦内駅 - 猿払駅 (6里)

6月11日、夜来の風雨止み、起きて戸外を伺えば雲隠れ霧去って天地快晴。この日一行は全員騎馬、午前9時猿払に向かう。3時間で駅通所着。猿払駅は猿払川の沿岸にあり、人家6戸の小集落である。川の幅員50軒、磯舟で渡すが、波頭高ければ往来途絶する不便あり。このため、本年架橋することとし既に着工している。夜、宮国事業手が支庁長を訪ねる。氏は道路測量のため出張し、設計について諸般の打合せをされたと察する。

#### (5) 猿払駅 - 枝幸駅 (13里半)

6月12日快晴。猿払駅から枝幸へは行程13里半であるが、途中斜内山道があり、一同騎馬で午前7時に出発した。佐和氏、私、支庁長、蓑田氏が最後尾である。私は馬が不得手である。馬も私をバカにして全く進まない。頭にきて思い切り鞭打つと、疾走して左右によれる。左手に鞍を持ち、右手で綱を引き何とか落馬を免れる。8時山軽駅に着く。猿払から3里半、最も僻地であり、官設駅通所のほかはアイヌの家すらない。枝幸戸長白坂庫太、枝幸有志藤野永作氏が迎える。支庁長一行は6騎となり、頓別駅を過ぎ斜内山道の険を超え、姥苦内駅に至れば、有志30余名が迎えに来ていた。一行が到着すると万歳三唱して歓迎の意を表す。支庁長は、昨年5月全村類焼の目梨泊の窮民を駅通所に召集、親しく当時の惨状を聞き、慰め、励まし、あたかも慈母の赤子におけるが如く。午後2時出発。枝幸に向かう。一行は40数名の多数となり、騎馬鉄蹄の音遠く響く。目梨泊は、学校焼け、旅館焼け、寺院焼け全村類焼し当時の面影もない。午後4時枝幸着、藤野旅館に投宿。

#### (6) 枝幸駅 - 幌別殖民地 (6里)

砂金採取の区域は延長90里、採取の状況はどこも同じであり、採取が盛んなペーチャン、パンケナイの状況を視察して全体を窺う。ペーチャンは頓別川の支流で、頓別川を遡れば15里、枝幸町から幌別原野を横断すれば11里である。パンケナイは幌別川の上流で、枝幸から7里である。この地はアイヌすら見ない深山幽谷で、最近ようやく一条の経路が開かれたが、道とは名ばかりで岩を穿ち藁に絡まりながら進むしかない。各々毛布1枚を背負い、食料その他は人夫に背負わせ、14日午前9時出発。一行は支庁長、蓑田、中島、和佐、藤野、私及び人夫の計7名である。藤野氏地理に詳しく案内を頼む。枝幸から海岸を1里半行くと木標がある。「幌別殖民地基点標」という。中島監守によれば、幌別原野は上下に区分するが、これは下原野とのことである。一面洋々たる

平原で際限がない。原野の中央に髪の毛程の道が通じている。そこを半里程進むと1軒の茶屋があり、垢の染みた半纏をまとった二人組がビールを飲んでいて。二人組は得意満面で、「ペーチャンは採取人5千、1人1日5分を下らない。1週間前山に入り砂金15匁で60円を得た。一攫千金なら急いでペーチャンに行き砂金を掘るべし。」と、これを聞き、砂金はこの様に盛んなのかと先を急ぐ。途中米味噌を背にする者、3尺余りの鉄棒を持つ者、バケツ、カッチャを背負う者、鍋、椀、毛布類を携える者、馬に米味噌、醤油を載せて運ぶ者、三々五々列を作って進むのに会う。彼らは皆砂金採取人で全く驚く外はない。2里程進むと坂がある。下幌別原野の終点である。頂上に立ち木陰に憩い冷泉で喉を潤す。下に幌別川がある。この川は鮭鱒孵化場があり、大きさ尺余の幾万匹が泳いでいる。坂を下ると2里半で上幌別殖民地の松垣農場に達する。午後4時、今日はここに泊る。

#### (7) 殖民地における砂金の評判

枝幸から松垣農場への6里の間、人家は6戸に満たないが、怪しげな茶屋が2軒ある。1日の売上は70円と聞くが、特に1軒は年頃の婦女3人が客を取っている。彼女らはいわゆる娼婦にて、一笑の値段は砂金5分という。山間の僻地ではあるが、日々の商売非常に多く皆砂金の恩恵である。農場と聞けば立派な家屋の様に聞こえるが、実際は笹葺きの掘立小屋で、僅かに雨露を凌げる程度に過ぎない。畳なく、建具なく、板の上に笹を敷いたもので、軟弱なる都会人は到底半日も過ごすことはできない。夕食を終え近くを散策すれば、道端に14~5の小屋がある。中に採取人が群居して、飲む者あり、歌う者あり、食う者あり、笑う者あり、千態万丈甚だ賑わっている。舎に帰れば四方山の雑談が正にたけなわである。特に農場の番人が支庁長の前で、「本夕閣下の光臨を拝したるは最も栄とするところ、しかし、御覧のとおり茅屋で閣下の膝を入れるに足らざるを」と。支庁長曰く、「1番の宿深く感謝する、往年私は戦場をさまよったが、食うに飯なく泊まるに家なく草を横たえて床となし、樹根を以て枕に替え、沢水を飲んで一生を拾った。それに比せば実に金殿玉座に臥する感あり」と。6月、内地では気温25℃はあろうが、当地は甚だ寒く、到底毛布1枚では足りない。私は寒気のため目を覚まし、火を焚き、酒を温める。僻遠の地、伊丹酒等はないが、異香ある小樽酒もなかなか乙なものだ。主人に向かって砂金の状況を聞くと、揚々として次の様に語った。「今のところ採取人はペーチャンに集まっています。ペーチャンでは許可を得た者がおらず、ウソタンやパンケナイの様に入場料を徴収されないからです。目下、5千人が入っていますが、採取高は2カ月で20貫以上と聞きます。私の知人は、4人組一週間で750匁採ったと言います。そうですね。ここを通る人は1日300人位でしょうか。おかげで、私のところも酒代が日々20円を超えます。」主人と相対して酌みかつ語る。時はあっと言う間に過ぎ、戸外を覗けば朝霧散して東天紅を告げた。

#### (8) 農場 - ペーチャン (5里余)

15日快晴、午前6時出発。殖民道路に沿って10町、ペーチャンに至る道がある。道非常に険悪で、背よりも高い熊笹を避け、倒木をくぐり、岩を穿ち、蔦に絡まり、股に達する溪流を横切って進むしかない。道が困難なうえ、優勢なる虻蚊軍の襲撃を受ける。もちろん顔は袋、足には脚絆、手には手袋を付けているのだが、油断は禁物である。ただこの間、露にしたたる野辺の花と溪間の黄鳥は一行を歓迎してくれる。行くこと2里

で小屋がある。樹皮をもって屋根とし、枝を連ねて壁とする。採取人らが野宿のため造作したもので、中に5～6人が休んでいる。我々もここで暫時休憩し、更に行くこと半里、左右に分かれる道がある。右か左か大いに惑う。左を偵察すると溪流があり、流れを遡ること10町で4～50人の集団に会う。彼らにペーチャンに行く道はここかと問うと、「我々もペーチャンに行こうとこの道を進んだが、これより先は道がなく進むことができない。」という。一行は右に行くことにした。道いよいよ険悪、半分は溪流を渡って行くしかない。行くこと1里でようやく山麓に達する。小憩で路傍の岩に座り、持っていたブランデーを飲み握り飯を食う。萎えた気持ちが蘇生し各々先を争って登る。山高く坂また急、5歩に一息、10歩に一憩、ようやく8合目に至り、心臓の鼓動激しく鼻息荒く流汗衣服を湿り滴る。疲労に耐えて頂上に至れば一陣の風懐に入る。下り坂は険悪ではあるが、登りに比して実に容易い。坂の終点に川あり、この川は一行の目的にして、その名をペーチャンという。時午後3時なり。

#### (9) ペーチャンの概況

ペーチャンは誰も採取許可を得ていない官地である。今この官地に入り、密採を試みるのは法律の罪人である。犯罪者はそれぞれ処分を受けるべきであるが、自ら好んで罪を得、鉄窓の苦を受ける愚者があるだろうか。支庁長着に幾千人の採取者はその姿を隠した。しかし、3里の間に6百もの小屋掛けあるより推せば、少なくとも5千の密採者がいるのは疑いない。支庁長は詳細に採取の跡を視察し、入山者を戒めて曰く、「探検視察とあれば仕方なし。しかし各人争い、公安を害し、火を失し、森林を乱伐し、川を変更し、堤防敷地を破壊する如きがあれば、探検者たると視察者たるとに関わらず、山から追い払うしかない。特に注意すべきは砂金の密採である。密採者は犯罪者として処分を受ける。砂金の採取に従事せんと欲する者あれば、パンケナイ、ウソタンの如く許可を受けた場所に行く外なし。」と懇々説諭して過ぎる。この夜粗末なる小屋を求めて泊まる。

#### (10) パンケナイの概況

6月16日曇り、早朝パンケナイに向かう。ペーチャン川を遡り、流れに逆らうこと2里、右岸に坂あり、すなわちパンケナイに向かう道である。坂は短いのだがすり鉢を伏せた急坂で、這いつくばって登る。頂上は木が生い茂り、四方見渡すこともできない。小憩の後下る。この道を進めば幌別原野を通過してパンケナイに至るが往来は少ない。すると馬の足跡がある。それは新しく少し前のものようだ。しかし、この様な山中に馬が通るはずがなく、熊ではないかと言う。熊と聞き恐れおののいていると、松村支庁長曰く、「百の猛獣ありとも恐れるに足らず、襲ってくるならば闘うのみ。」と。死ぬも生きるも定めとあきらめ先へ進む。下れば川あり、ポンパンケナイ川と言う。川に沿って下れば堀川砂金事務所あり。時午後4時。パンケナイの借区延長7里、明治31年11月採取許可を得て、本年5月に着手した。採取額は少額だが、金質純良で評判良く、採取者日に日に増え2百人に達する。同事務所も月6円の採取料を徴するが、料金前納の資力なき窮民には10日間試掘させる。このため採取者喜んで四方から参集するのも道理である。松村支庁長、堀川氏に対し、「借区に侵入し財産を奪うのは盗賊であるが、この様な山中では知らずに手を付ける者もあるかもしれず、借区主は区域に木標を立てる等、管理体制の万全を望む。」と訓示した。その夜事務所に宿泊、翌朝採取の状況を視察。その有様はペーチャンと同一である。正午帰路につき、午後4時枝幸着。

(十一) 内地から枝幸までの費用

横浜から枝幸までの運賃は船で9円50銭、東京から汽車を使えば11円81銭なので船が安価である。小樽の旅館は、越中屋、トキ廻送店、稚内では木下廻漕店、飯田旅館、枝幸では藤野旅館に泊まるのが良い。宿賃は色々だが、通常1円50銭である。稚内に上陸して枝幸に陸行すると、徒歩で3日、馬では1日かかる。稚内枝幸間は32里であるが、駄賃は1里20銭で、枝幸まで6円40銭である。道中6里ごとに駅通所があり、旅客は駅通所に泊まらねば、野宿することになるので注意が必要である。

---

意識 北海道砂金案内

---

著 へるふね

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---